

第37号 (2015-7月発行)

# 根郷 寿だより



発行 佐倉市立根郷公民館

〒285-0815 佐倉市城 343-5

☎ 043-486-3147

編集 根郷寿大学

根郷寿だより編集委員会

交通安全と車運転の

三つの元について

元受講生 大川義郎

春の全国交通安全運動が終わりま  
した。

昨年十二月末現在、全国の交通事  
故による死者は四千百十三人、千葉  
県の死者は百八十二人、その内高齢  
者が九十五人で全体の五十二・二パ  
ーセントで過半数を占めている。

全国交通安全運動は古くても新  
しく、かつ身近な問題である。この  
安全運動の始まりは、昭和二十三年  
十二月に一週間行われ、昭和二十七  
年から春、秋と年二回実施され六十  
六年となる。

交通安全標語の第一号は、「留守に  
さんすな手に持つラップ フートペ  
タルと耳と目と」であるそうだ。当  
時の警告器は、ゴム毬状が付いたラ  
ップでこれを握るとブウブウと音を  
鳴らし注意喚起していたという。そ  
こで交通安全と車の運転について考  
えてみたい。

第一は、「交通安全とは」である。

県内の大きなある企業は、会社内で  
挨拶に交わす言葉が「ご安全に」で  
ある。相手の全ての行動に対し、ご  
無事、安全への祈願・注意喚起をし  
ているのである。

交通安全とは、一つは、地域におい  
て交通事故が発生しない状態にある  
ことである。人間の生存要求であり、  
すなわち生命、身体の安全確保は、  
「全てのものに優先する」。そして安  
全が確保されて始めて他の価値を追  
求することができるからである。福  
祉社会実現の第一歩は、まず生命を  
大切にし、他人や自分の生命(いの  
ち)を守ることにある。二つ目は、安  
心して通行できるという安心感であ  
る。生命(いのち)、身体の安全は、  
単に事故に遭わないということでは  
なく、事故の脅威感がないこと、あ  
るいはほとんど気にしない状態にあ  
ることである。  
歩行者、特に老人、子ども、身体の  
不自由な人などにとっては、生活道  
路における車の走行スピードの速さ  
と交通量そのものが脅威を与えるか

らである。しかしながら国民皆免許、一家に車二〜三台など高度に発達した車社会、車の交通がなくてはならない時代である。

この車社会の危険から身の安全をまもるためには、交通ルールの原則の順守と身を守る安全行動がとりもなおさず大切である。

第二は、「車運転の三つの元」である。一つ元は、「手元」である。ハンドルを正しく持ち操作する手の動きである。二つ元は、「足元」である。ブレーキを踏んだり、アクセルペダルを加減するなどの足の動きである。三つ目の元は、「心元」である。手元、足元をコントロールして運転に必要な外界からの知覚、判断、決心などを適切に情報処理することが「心元」である。

ブルトレお疲れさま

そして新幹線かがやき誕生

一班 直江 國雄



ブルトレ「北陸号」が二十二年三月に又二十六年三月には「あけぼの」がそして今年三月のダイヤ改正で上野札幌を結ぶ「北斗星」が最後にとうとう姿を消します。

私はあの懐かしい夜行列車「北陸号」二十二年三月ダイヤ改正最終列車富山から上野へ乗車しましたが殆んど眠れませんでした。

私事、戦中富山市で生まれ、昭和二十年七月末軍の爆撃情報網から家族で白萩村（剣岳登山の富山側、馬場島登山口に通じる山合の村、現上市町）（※）極楽寺へ疎開しました。

（※） 剣岳登山の富山側、馬場島登山口に通じる山合の（村）現在町

八月二日未明<sup>B29</sup>焼夷弾により富山の空が明々と燃えあがりました・・・あの無念さは今も目に焼きついてます。その後焼け跡をさまようこともあり、食糧不足し闇市への買い出しが日常の風景でした。小学校六年まですごしましたが冬は積雪が多く学校に行き（山下り）はスキ一、帰り（山上り）はかんじきの時

代でした。（往路くんだり、復路のぼり）

中学からは、こんな山の中ではという事から兄夫婦のもと高岡へ引越して育てられました。その頃から徐々に食生活も上向いて復興の兆しが見えてきました。が私はまだ実父母が忘れられず約一年間位は土曜日になると上市に帰りあの電車に乗ると何時何分に着くとか時刻表を見たりその後親兄弟に連れられて長野善光寺や京都へでかけることから旅が大好きになりました。

運良く大学は関東でしたので上京するルートとして

① 信越線（関山（今は妙高高原）でスイッチバック、横川・軽井沢ではアプト式急勾配六十六・七パーミル）碓氷峠から

② 上越線（湯檜曾から土合、土樽から越後中里の2回ループ式（山の中を2回転）清水峠のトンネルを超えるかの二つでした。

最初の頃は蒸気機関車で鈍行客車富山を夕方五時出発雪国からトンネルの先は青空。

その空に向かって走り続け上野駅には朝五時頃着の十二時間の長旅で、疲れたのか目や顔をこすった後で鏡を見ると縞模様となっているのを思い出します。飛行機や夜行バスにも乗りましたが今までJR（国鉄）で百五十回近く往復しました。

夜行列車では「北陸」「越前」「能登」号が、昼間は「はくたか」「白山」号等運行経路は二転三転しながらも今日まで送りどけてくれた事の実績、勇気と逞しさです。その中ブルトレ「北陸」号は昭和二十五年上野〜大阪へ急行北陸として、昭和三十一年より夜行急行（上野〜福井）に変更、昭和五十年には寝台特急（新幹線博多開業で余剰となった20系寝台客車を使用）に格上げして上野〜金沢に運転された時ほどびっくりしたことはありません。その後平成十四年には一人用個室A寝台（オロネ）1両、一人用個室B寝台（スハネ）3両、二（オハネ）〜三段式（スハネフ）B寝台4両の計8両、その時はシャワー室も設置動くホテルとも

思えました。しかし上越新幹線の開業で北陸へのルートにも大きく変化の時代が来しました。当初上越新幹線長岡より「はくたか号」が金沢へ、その後平成九年三月からは、ほくほく線開通乗り入れにより越後湯沢に変更され、平成十四年在来線(狭軌)でありながら時速百六十キロと国内では一番早く走る電車となりましたが又平成二十二年七月京成線上野から成田空港へ新型スカイライナー(時速百六十キロ)が同じく走ることで人気を呼んでいます。これは高架又トンネルが多いことから踏切が少ないなど目的地まで早く結んでいきます。

一方長野新幹線はあの冬期オリンピックの年、平成九年十月に開業(皆さん冬のオリンピック現地で見られましたか私は野沢温泉会場でバイヤスロンを見ました。東京へ帰る新幹線混雑さが忘れられません)で信越線が(横川止まり、峠の釜めしが食べられず軽井沢まではバス運行となりました)廃止で昼間の「白山号」

が姿を消し残念でした。残るは上越線(水上・湯沢・長岡)經由のブルトレ「北陸号」が夜間走るのみとなりました。しかし、列車は一度造られるとレールの上を走るので故障は少なく修理すれば四十年〜五十年走るようですが、五十年前の部品が製造されなくなることや又目的地まで早く着く手段が次々と考えられ新幹線や飛行機によるスピードアップ、夜行バスの安い運賃等の上乗車率も当時の六十%以下に減少したことなどが大きな原因のようです。私達は夜行を利用すると翌朝から一日有効に時間を使える魅力又首都圏からの北陸フリーきつぷ四日間エリア内有効、更には一人用個室B寝台も乗車出来最高のよるこびでした。今回、私急用で帰富した際運良くというか神業かなあ(平成二十二年三月)最後のB寝台下段がとれて乗車、しかしなつかしいやら楽しいやら気持ちが高揚して殆んど寝れませんが、定時に上野着・・・鉄道ファンのカメラマンが多勢いて「これでブルトレ」

に乗れないのかなあ・・・と思い記念写真を撮りました。大変懐かしく又悲しい気持ちで安全第一に運んでくれた「北陸号」が回送車として車庫入りする姿に「ありがとう」と感謝を伝え見送ったのです。

さてその富山にも百年に一度あるかないかの開豁北陸新幹線が長野經由金沢まで新型車両E7系「かがやき・はくたか号」で(富山まで二時間八分)三月十四日から結ばれます。一部紹介・・・世界遺産五箇山合掌造り集落、国宝瑞龍寺、越中おわら風の盆、富山湾から三千メートル級の立山連峰(世界で三か所の一つ)、海の幸(ぶり、かに、白海老、ますの寿司)立山黒部アルペンルート(黒部ダム、雪の大谷)などキトキト(新鮮な)魚がたべれるよ又水や米もおいしいし、山も美しい自然宝庫の豊かな越中富山へ来られ(是非おいでよ)お待ちしております。

「ブルトレインってどんな列車か・・・ご存知かとおもいますがブルトレインは「濃い青」で塗

装された(24系・14系)の客車寝台列車を指すよび方として使われ最初(国鉄)JRが正式に定めた名称ではなかったのですが昭和四十年代鉄道雑誌で使われ広がったところへ蒸気機関車全廃後の五十年代にブルトレインブームとなり寝台列車の愛称として定着「ブルトレ」夜間重要な長距離移動手段として東海道では「あさかぜ」「富士」「はやぶさ」「出雲」又上野からの北では「あけぼの」「北斗星」「北陸」など青森〜大阪「日本海」などがあります。しかしこの三月のダイヤ改正で「北斗星」も姿を消す最後の列車となりました。

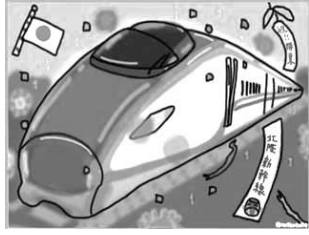
「103歳の聖路加国際メディカルセンター理事長日野原重明先生は・・・いろいろTV新聞等でもご存じかと思えますが

朝日新聞平成二十七年一月二十四日付に103歳私の証あるがまゝ行く今年(今年)は戦後七十年という大きな節目の年です。「我々高齢者はこの社会で戦争の記憶を風化させないよう

全力を尽くす」というメッセージです。現在の日本で七十五才以上の人が全人口に占める割合は一割強で即ち太平洋戦争を身をもって知る人間はこの人達しかいないことになりま

す。自らが体験した戦争の悲惨な思い出、記憶をたどえそれがどんなに小さなものであろうとかすかに薄れおぼろげになっていようと可能な限り、次世代に語り継いでいかなければならないと思うのです。

※ 私は旅行が大好きでブルトレ「北陸号」最後の列車に乗車したおもしろい



歴博ひとくちガイド

銅鐸について

元受講生 座間 功

第一展示室に入って、突き当りが弥生時代の部屋である。その部屋の左奥に銅鐸のコーナーがある。銅鐸については謎が多く今でも良く解っていない点が多いようですが、資料によると銅鐸は紀元前四世紀から紀元前二世紀にかけてつくられた青銅（銅とすず）のカネである。

もともと銅鐸は古代中国の胴鈴に起源があり、朝鮮半島から日本へ伝わったとされている。胴鈴は、小さくて人の腰や馬の首などつけて金属の光と音の力で邪悪をしりぞけ人を護る役割を持っていたと云われている。そして銅鐸は稲作との関連が深く、当時、稲の豊作は稲魂によってもたらされると思われており、銅鐸が発する光と音が稲魂をおびやかすモノを追い払い豊作をもたらすと思われていた。

また、銅鐸の表面にはいろいろな絵が描かれている。その絵は弥生人

を始め、ヘビ、トンボ、サカナ、シカ、イノシシなどである。弥生人は、これらの人や動物などを使って生活の様子を描いたと思われる。銅鐸の絵に出てくる弥生人は頭の形が○い

のが男で、△は女である。これらの絵により、弥生時代の仕事は男と女が役割を分担していたと思われる。狩りは男、脱穀は女の仕事だったのである。この様な事から銅鐸はおそらく、その年の稲の豊作を祈る春のマツリで鳴らしていたのではと云われている。

その後、奥にある様に次第に大型化し、鳴らす事はなくなり、見る祭器に発展し西日本で勢力の象徴となつて行つたと云われている。



ふるさとへの旅（自分史序編）

四班 斎藤 たかし

その日の朝方迄、東北秋田は雨だ

った。平成二十六年十月十八日早朝、JR佐倉駅始発の快速電車に乗り、東京駅から秋田新幹線こまち三号にて、久しぶりに私の生まれ故郷秋田の土を踏んだ。

私は当時は母方の実家があった秋田市で生まれ、間もなく戦争真っ只中は東京荻窪で生活した。支那事变と太平洋戦争の中、幼年期に数々の経験をしてきた事は今でも忘れられない。

その後昭和二十年の春、秋田市に疎開して中通り国民学校二年生の夏、終戦を迎えたのである。翌年（国民学校は小学校へ名称を変更）父親の実家があった由利郡平沢町（後に仁賀保町、さらに合併して現にかほ市）に転居した。

そして平沢小学校三年生から旧平沢中学を経て、県立本荘高校を卒業する迄の凡そ十年間を過ごしたにかほ市は、私のふるさととして鮮明に残る思い出の土地である。

十月、喜寿を機に「平中六期同年会」に参加した後、佐倉に帰宅して

から幹事に送った礼状を、人物だけはイニシャルに変え原文のまま紹介する。

.....

・平中六期同年会・幹事長M様  
この度は久しぶりに同年会に参加して、同期の皆様と楽しく飲食しながら語り合えたことに満足しています。十月十八日早朝佐倉市から東京経由で新幹線こまちに乗車、朝方は雨の中、日本百名城の一つである久保田城がある県都秋田市の様子を味わう間もなく、酒田行の普通列車にて仁賀保駅に下車しました。

父母の墓は東京八王子に移したものの先祖と斎藤本家の墓がある龍雲寺を訪ね、束の間ですが花を供えて後皆様にお会い出来ました。  
折から国民文化祭で、にかほ市も会場の一つ、宿泊先が混むのは止むを得ません。二駅も北の駅前ホテルに予約したこともあり、二次会（級友のSさんから後に聞き、三次会もやったとか・・・）に参加しませんでした。楽しいひとときでした。

隣市である由利本荘市の羽後本荘駅周辺は高校時代とは一変。翌朝十九日、思い出を残して特急いなほで新潟乗換え、上越新幹線とき乗車で東京着、快速成田空港行で佐倉に辿り着いたのは夕方五時過ぎでした。

最後になります。この度の開催の様子を準備して下さいました幹事の皆様によりしくお伝え下さい。  
では、お元気で。 十月吉日

・付記・毎年十一月下旬には東京プリンスホテルを会場に「にかほ市ふるさと会」が開催されている。合併後にふるさとを離れて関東地区に在住している多くの先輩、後輩の皆様との再会も楽しみの一つになっている。

・「広報にかほ」十一月一日号に掲載された私の短歌です。

『ふるさとの友らと共に喜寿祝い  
思いで多きあの日あの頃』

・平成九年度寿大学講座の午後に、自分史づくりのコースあり、十一人の仲間で「自分史集」を作成しました。振り返れば書き加えたい事が山

ほどあり、再開したく筆をとりました。



年よりのつぶやき

元受講生 廣吉 正毅

年をとってからは何か趣味をもち気楽に暮らしたいと思っていた。

そんな中、以前から興味をもっていた史跡巡りを始めるようになった。史跡の由来と当時の人たちの生活に思いをはせている。

先だっても仲間と上野公園に行き史跡めぐりをした。ここには他にも興味がある史跡があり改めて訪れてみたいと思っている。

このところ気になることがある。いわゆる報道によれば人口の四人に一人が六十五歳以上と言う。いま、老人の人口が増え続けているのに地域の老人クラブの会員は減っている。

そうだ。何故だろう不思議な気がする。とにかく年を重ねて家に引き籠も

つてばかりいては健康によくはない。折を見ては外出して適度にからだを動かし、出会った人とコミュニケーションを図ってみる。

さて、老後を健やかに楽しく生きるにはどうすれば良いのか。人生には限りがあり、いま自分に何が出来るかを考えてみる。

その何かを思いいたら、ここで躊躇せずに一歩踏み出して動く。そうすればその視界が自然と開けてくるものだ。まず、世間のお年寄りには若者にはない豊かな知識と経験がある。この素晴らしい知識や経験を地域に活かさない手はない。

例えば、学童の登下校の交通整理と防犯パトロールに協力する。それは幼い子供たちが痛ましい事件に巻き込まれないよう、その安全を見守っていくボランティアである。

これらの見守りは地域の安全の手助けになると思う。おまけに本人はからだを動かすことで活力を得て健康になつていく。

私は偉そうにこう言うが「何様」

でもない、趣味やボランティアで生  
きがいを貰っている市井の一人人に  
すぎない。

この先もって夢と生きがいを見つ  
けて充実した老後を過ごしたい。



行って見たかった「お寺」

七班 吉野強三郎

京都に「六道珍皇寺」と言うお寺  
があります、地元の人に「六道さん」  
と呼ばれるお寺ですが、あまりメジ  
ヤーではないので行かれた人は少な  
いかと思います。

臨済宗の総本山の「建仁寺」口か  
ら仏典を出している空也の像で有名  
な「六波羅密寺」の近くです。

このお寺は普段は、まばらな参詣  
者ですが、盆近く（八月七日から十  
日）、先祖のお迎えに人々が参詣し大  
変な人出だそうです。

お寺が平安京の東の墓所であつ

た鳥辺野に至る道筋にあたり、この  
地で「野辺の送り」をされた事、小  
野篁が夜毎、冥府通いの為、本堂裏  
庭にある井戸をその入口に使って  
いた事で、黄泉の国に近いからそう  
なった様です。小野篁は、平安時代前  
期の公卿・文人で一時期、流行った  
高学歴、高収入、高身長で「三高」  
の人物です、篁は夜ごと井戸を通っ  
て地獄に降り、閻魔王のもとで裁  
判の補佐をしていたと言われていま  
す。その井戸の近くに、朝帰る為の  
「黄泉がえり」の井戸もありました。  
本様な様な嘘の話、それもまた  
「良し」ではないでしょうか？

この寺の鐘はついて鳴らす鐘で  
はありません、綱を引いて鳴らす鐘  
です行く機会があれば鳴らしてみ  
て下さい、心が「すっきり」するか？  
人夫々ですね。



ボケない為の方法

八班 原田 渉

「ボケ防止には頭を使え」は間違っ  
ています。・・・とTV「林修の今で  
しよ講座」で

帝京大の新見医師が言っていました  
（死ぬならボケより癌がいい！）著  
者です。

ボケない為の方法は三つ

① 「カラオケ、料理、絵画、ボラ  
ンティア、老人会」と言う社交  
的な趣味が良いのだそうです。

② 「歩く筋肉を保ち続ける事。一

回二回、三十分歩く事。出来れ

ば早足である事。

③ そして注意すべき事は必ず帽子  
を被る事です。

その帽子の横に「ボケの花」などの  
アクセサリを付ける事です

・・・これを「ボケ帽子」と言いま  
す。

編集後記

編集委員 TS生

平成二十七年に入りました。例

年の如く、春は出会いと別れの季節、  
会うは別れの始めとも言いが筆者も  
何人かの公民館職員にお世話になっ  
た。

・左記今年度も宜しく

・根郷公民館

館長 木村 武雄

学芸員 松田 富美子

主査補 菅原 久志

主任主事 尾形 弥生

戸田 さよ子

・根郷寿大学

会長 樹村 光雄

副会長 福久 伍一

副会長 國見 美子

・根郷寿だより編集委員（順不同）

栗尾 義治 齋藤 雄

佐藤 静江 松井 強

山城 安男 吉野 強三郎

原田 渉

・編集委員として少なくとも女性一  
名のご協力をお願い致します。

・投稿は受講生とは限らず、根郷公  
民館での他の講座利用者を含め幅広  
く歓迎しています。